



海軍飛行練習生の食事と  
「芋キントン」



koberyol

海軍飛行練習生が使う食器は、「大」・「中」・「小」・「皿」の四種類である。めし盛り食器の直径は十二センチほど、六～七センチの深さがあり、練習生にはもう少々大きい方がよい、と常に思っていた。

一番大きいのが味噌汁、小のサイズがお茶用、皿はおかず用なのだが、食事の時間はそれぞれが子ども心にかえてガツガツ食べる。ようするに早く食べることが基本ということになる。食事中であろうと、トイレ中であろうと、海上勤務はつねに自然の猛威にさらされている。もし、何かことがあれば、食べるどころの騒ぎではない。食事の機会は千載一遇のチャンスなのである。これを逃すわけにはいかなかった。「腹が減ったら戦（いくさ）はできない」の喩えの通りであるから、噛んだり、咀嚼したりすることはあまりしない。したがって早い者は、だいたい三分から五分くらいで平らげる。要領の悪い人間ほど食事を終えるのが遅くなる。早食いのコツというものあって、口は腹に入れるための専用の入り口と割り切り、食べながら鼻で呼吸すると要領を習得したことになる。そしてコツであれば覚えることができるのである。

そして配膳時にみなの眼が何に注視されるかという、それは飯の盛り加減なのであった。この時ばかりはみなの眼が虎子眈々と光る。もとより盛り加減は平等にできるはずもなく、機械で配膳しているわけではないのだから誰しも日によっては多い少ないがあるものだ。

しかし、こと飯に限っては、そんな道理は働かない。ネジがすっ飛んでしまう。盛り付けてもらい座席に着いて自分の飯をみると、隣の席の者に比べると、ころなしに少ない、そんな気がして悔しくなる。損をした気分にもなる。育ち盛りの年頃である。食べても食べても、もっとも、という年代である。

かといって文句をつける筋合いではないから、いつも腹七分目でお茶をガブガブ飲み、襲ってくる空腹をしのぶ。したがって薬缶はそうやってみなが空腹しのぎにお茶を飲むものだから、いつも空っぽだった。

※

人気メニューについても書いておこう。

まずダントツの一番人気は海軍の伝統食の「カレーライス」だった。「肉じゃが」も人気が高かったが、これは時々しかお目にかかれないものだった。

「肉じゃが」といえば、やはり思い出すのはバルチック艦隊を破った東郷平八郎のことだろう。東郷元帥が若かりし頃、英国の留学したとき、そこでお目にかかった料理とかメニューの日本に持ち帰り、のちにそれが海軍でひろまり、やがて全国に普及し、日本の家庭料理の定番になっていったらしい。このようなルーツを知った上で「肉じゃが」を味わうと、また一際、感慨深いものがある。

※

話を元に戻そう。

晩秋のことである。烹炊所（ほうすいしょ……煮炊きをするところ）前の軒下に積まれている俵に何やら異変が起きているらしいと、練習生のあいだで囁かれだした。そこに積まれている俵の中身はサツマイモなのである。このサツマイモが腐り、異臭を放っていた。

このまま腐らせてなるものか、と思うが、どうすることもできない。生でもいいからガツガツ食べたいが、歯噛みするばかりで打つ手がない。と思っていた矢先に、「イモを各部隊に緊急配給する」の伝達があった。食卓番はそれぞれ烹炊所に配給に行つて驚いた。いつも怖い顔をしていた配給員の態度が、とても優しいものに変化していたのだ。彼はこう言った。イモはイモキントンにした。配給するから何度でもいくらでも取りにこい、と。

練習生は、この時とばかり食べに食べた。飯を盛る食器にそれぞれイモキントンを二杯は食べただろうか。こんなに腹がふくれるほどイモキントンを食べるのははじめてで、それは皆も同様であったようだ。いささか度を越して食べ過ぎたようである。顔を下に向けると、さっき食べたばかりのイモキントンが胃から逆流し、口からあふれだしそうになる。しかたなく、めいめいが顎を上に向けている。

そのとき折悪しく点呼があり、イモキントンを食べたばかりの全員が整列した。皆が顎を出して整列している。何とも奇妙な恰好である。

不審に思ったのは上司である。実は先刻から練習生の様子がおかしい。なので点検ということになったのである。点検とは日常のいろいろな事柄について、上司が気がついた点を注意するというものである。家庭の場合でも寝る前はガスや電気の安全を確認するのと同じ趣旨で行われるものである。

航空隊の点検はじつに数が多い。「分担点検」は練習生の身だしなみを調べて服装など姿勢はもちろんのこと、顔色などに異常がないか、ひとり一人見てゆくわけである。

これにちょうど顎を突き出して全員が整列したものだから分隊長はビックリしたらしい、とは、後日聞いた話である。このほか点検には、「被服点検」、「火の元点検」、「防火用具点検」などがあり、記憶外のものも含めると、もつともつとあつたように思われる。